



Title	Chaucer と 『リディア物語』 I
Author(s)	比良, 俊典
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1983, 23(2), p.29-41
Issue Date	1983-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/15162
Right	

This document is downloaded at: 2020-11-25T02:45:49Z

Chaucer と『リディア物語』

I

比 良 俊 典

Chaucer and the *Comedy of Lydia*

I

Toshinori HIRA

『リディア物語』(*The Comedy of Lydia*)⁽¹⁾ は「梨の木」を扱った様々な話⁽²⁾の中で、Chaucer の『商人の話』(*The Merchant's Tale*)によく似た話の一つである。女に組し情事を隠蔽する不思議な力を備えた梨の木⁽³⁾は、聖域を表わす庭⁽⁴⁾の真ん中であって、この木に登ったり、実を取ったりすることは愛を意味しているのだ。『商人の話』、『リディア物語』、そのいずれも、奥方が若い騎士と情を通じ、主人を言いくるめて愚弄している。二つの話は大筋で大層類似してはいるものの、また大小異なる点も多い。

まず、Chaucer は、愚弄された主人 January を冷やかに突き放し、この話の話手、商人に『聞手の不興を買わぬよう』気遣わせて話を結んでいるのに、『リディア物語』の作者⁽⁵⁾は、主人 Decius を初めとし、関係者の対応まで記して、話を纏めている。

Lydia 555

Lusca hides her laughter, Pyrrhus his pears, Lydia her belly;
One is made unhappy by the deception of three.

Chaucer は、奥方の May が若い騎士 Damian との情事を主人に見咎められ、散々言い逃れをした揚句、機嫌を直した処で、January にこう対応させている。

IV (E) 2412

This Januarie, who is glad but he?

He kisseth hire, and clippeth hire ful ofte,
 And on hire wombe he stroketh hire ful softe,
 And to his palays (palace) hoom he hath hire lad.
 Now, goode men, I (i.e. the Merchant) pray yow to be glad.
 Thus endeth heere my tale of Januarie;
 God blesse us, and his mooder Seinte Marie!

『リディア物語』が January の話の種本の一つとすれば、『商人の話』は Lydia の話にはない意味が加わっている。January の話は、話手の商人の考えとか、境遇が裏打されているのだ。January の話は商人の話だから、『リディア物語』のように、ただ女の悪巧みを戒める話⁽⁶⁾ではない。愚弄された主人を笑い種にしながらか、実は騎士を諷刺する、こういう手が込んだからくりがあるように思われる。

これと関連して、人物、筋立にも、Chaucer は『リディア物語』以外の種本から、大小様々な書き添えをしている。⁽⁷⁾ 例えば、綺麗な娘を娶る打算的で、およそ騎士らしからぬ老 January の女性観。この騎士の奥方になる May は Lydia 程多情とは思えぬ。悪巧みに掛けては Lydia の方が上。尤も、January に Damian との情事を見咎められると、他ならぬ主人のためなどと January をたばかってはいるものの、これには神の助力がある処が Lydia とは違う。奥方の不貞を見兼ね、May に盲目的な愛をしている January の目を開いて遣った Pluto の向こうを張って、この神の後 Proserpine が同性の好で、責め立てられて窮地に立った May に力を借している。梨の木もさりながら、このため January は言いくるめられ、May の機嫌さえ取っている始末だ。

以下、幾つかの点について、Chaucer の『商人の話』と『リディア物語』の違いを観てみることにする。

愚弄された主人

商人が January の話を済ますと、宿の主人 (Host) は女の性^{さが}について否定的な寸評を加え、

IV (E) 2421

Lo, whiche sleightes and subtilitees

In wommen been! for ay as busy as bees
 Been they as sely men for to deceyve...

と言っている。宿の主人の女房殿はいざ知らず、商人も女房に手を焼いている。宿の主人は、商人が女の手練手管に詳しいだろうから、その手について話すよう要請するのだ。

IV (E) 1241

Syn ye (i.e. Merchant) so muchel knowen of that art
 Ful hertely I pray yow telle us part.

商人がどの程度女房に手を焼いているか、定かではないが、バースのおかみさん (Wife of Bath) のような女からすると、亭主なぞ焼餅焼で、欲の皮が突っ張った助兵野郎。到底、一筋縄ではいかぬ厄介な代物。だから手練手管は女の自然という訳。嘘でも何でも構わず捲し立て、思いの儘振舞うが勝ち。『賢い女子だとして嘘の一つや二つはヘッチャラ。そこへいくと男なんぞ、いくら口が達者だからって、ワシラの半分も嘘なんか吐けやしないのさ』と、バースのおかみさんは嘯く。

III (D) 222

They (i.e. the Wife's husbands) were ful glad whan I spak to hem
 faire;
 For, God it woot, I chidde hem spitously.

half so boldely kan ther no man

Swere and lyen, as a womman kan...

バースのおかみさんの秘訣はこんなもので、女の手管に詳しい商人に、話を薦める宿の主人の言葉と符号が一致している。⁽⁸⁾ このおかみさん、今の若い亭主 Jankin が読んで聞かす毒婦⁽⁹⁾にも引けは取らぬ。否、むしろ女の性を拠所にして生きようというだけ逞しい。嘘を吐いたり、泣いたり、甘えたり、手管は神から戴いた女の知恵という訳。

III (D) 400

al swich wit is yeven us in oure byrthe.

それにしても、January の話を聞いて、宿の主人は女の悪巧みに辟易しているの、例えば、『粉屋の話』(*The Miller's Tale*) の結びとは趣を異にしている。年が違うということの外、『粉屋の話』の亭主は、徹頭徹尾愚弄されっ放しなので、同情的でさえある。ということは、それだけ悪い女房には否定的ということだ。ちよっぴり教訓的でさえある。¹⁰⁾ 説教染みていないのは、この手の話が馬鹿馬鹿しいお笑いで終わるため。『粉屋の話』は、学僧の Nicholas も司祭の助手 Absalom も亭主共々痛い目をみ、笑いを添えているためと思われる。

I (A) 3850

Thus swyved was this carpenteris wyf;
For al his kepyng and his jalousye;
And Absolon hath kist hir nether ye;
And Nicholas is scolded in the towte.

不倫の謗りを別にすれば、大工の若い女房 Alison だけが、思いの儘振舞っている。翻って『リディア物語』はというと、これも、Lydia を廻る三角関係の当事者だけでなく、関係者まで総嘗めにして、事の結着を示している。この点では、『粉屋の話』は『リディア物語』に似てはいるものの、Alison 以外の他の当事者、および関係者の結末は正反対。Lydia の寵を受け懇ろになった Pyrrhus も、中藪の Lusca も Lydia 共々無疵。格別、焼餅焼とも思えぬ Decius だけが、一身に嘲笑を浴びている。宿の主人の言葉を借りると、『善くない女房殿には、儂のような真っ当な者が打って付け。手練手管は女子の性』ということ。

梨の木

『商人の話』では、May が主人の近習 Damian と思いを遂げるのに、梨の木は使われている。初めは、自分に懸想する Damian を、それとは知らず

病の床に訪ねたに、やがて、心憎からず思うようになった揚句、梨の木がある庭に通じる木戸の鍵を作り与え、前もって、この若衆を木の上に待たせて置くのだ。

IV (E) 2207

She saugh wher Damyan
Sat in the bush, and coughen she bigan,
And with hir fynger signes made she
That Damyan sholde clymbe upon a tree,
That charged was with fruyt, and up he wente.

梨の木を情事に使う点では、『リディア物語』も同じ。『商人の話』に対し『リディア物語』の方は、Lydia が Pyrrhus に思いを寄せ、難題を突き付けて自分の心を計る Pyrrhus に、Lusca を使い、言い寄っている。梨の木は、主人の近習と情を通じて、主人をたばかった Lydia が、更に主人を愚弄する手立てとして役立てられているのだ。これに対し、結果としては主人を言いくるめることになったものの、May の場合、梨の木との係わりは Lydia 程強くはない。梨の木は、May が神の助けを得て初めて、January を言いくるめる際に、所を得た形になっているのだ。無論、梨の木が情事の場合であることは言うを俟たない。

Lydia 547

The Duke (i.e. Decius) said: “Either I’m mad or deceived by this feat.”

Lydia said: “It is not Pyrrhus but the pear tree that moves me.”
“As he saw, I say, so saw I, and I thought it was true;
But now I see more surely that it is nothing.”
“As I told you, Duke, it was the fault of the tree;
Perhaps it will mislead others again.”

Chaucer IV (E) 2366

“Out! help; allas! harrow (help)!” he (i.e. January) gan to crye,
 “O stronge lady stoore(bold), what dostow?”
 And she (i.e. May) answerde, “Sire, what eyleth yow?
 Have pacience and resoun in youre mynde!
 I have yow holpe (helped) on bothe youre eyen blynde.
 Up peril of my soule, I shal nat lyen,
 As me was taught, to heele with youre eyen,
 Was no thyng bet, to make yow to see,
 Than struggle with a man upon a tree.

神々の助力

Lydia は Decius をたばかるのに梨の木を役立て、Pyrrhus と情を通じる様を見せ付けながら、見なかったと主人に思い込ませている。

521

“This tree has a defect,” said Lydia sighing;
 “Indeed, heights are often apt to distort vision.”

これとよく似た言拔けが、May の口を吐いて出てはいるものの、実は、May の後ろには Proserpine がいて、同性の好で、January にいびられるこの若い奥方を助けている。

IV (E) 2264

quod Proserpyne “...
 Now by my moodres sires soule I swere
 That I shal yeven hire suffisant answer,
 And alle wommen after, for hir sake;
 That, though they be in any gilt ytake,
 With face boold they shulle hemself excuse,

And bere hem doun that wolden hem accuse.”

Chaucer は神話の神に関する知識を、話の筋立の中に織り込み、話の進み行きに役立てている。⁽¹¹⁾ 『商人の話』では、January の立派な庭を司る神として、Pluto が后共々相を現し、この庭の主に対する May の酷い仕打ちに首を突っ込んでいます。こうした人間次元の事と、神々の次元の事との交錯は、例えば、『騎士の話』(*The Knight's Tale*) の Palamon と Arcite の場合同様、唐突な感を免れない。人間次元の事に、神々の係わりが影響を蒙っている。⁽¹²⁾ だが、これとて所詮、人間相互の係わりを、超自然的存在のそれに置き換えているのだ。Pluto と Proserpine は神であって神ではない。この神々は、ある部分では January と May その人である。⁽¹³⁾ Proserpine を掠奪した Pluto は、Cupid に仕向けられたとはいえ、Satan の御曹子、后は主人の横暴を悲しむ、不仕合わせな花嫁なのだ。⁽¹⁴⁾

IV (E) 2229

Proserpyna,

Which that he (i.e. Pluto) ravysshed out of Ethna
 Whil that she gadered (gathered) floures in the mede—
 In Claudyan ye may the stories rede,
 How in his grisely carte he hire fette (fetched away).

Pluto の女性諷刺は May を気遣う January の嫉妬、Proserpine の同性鼻唄は、横暴な January に厭味を言われる May の哀しみに通じるものがある。⁽¹⁵⁾

IV (E) 2165

For Goddes sake, think how I thee chees,
 Noght for no coveitise, douteless,
 But oonly for the love I had to thee.
 And though that I be oold, and may nat see,
 Beth to me trewe...
 and to youreself honour.

May に対し目が見えなくなった January は、しきりに、奥方の不実を気にしている。そういう January を裏切ろうとする May に、Pluto は女に対する悪口を禁じ得ない。

IV (E) 2237

“My wyf,” quod he, “ther may no wight seye nay;
Th’experience so preveth every day
The tresons whiche that wommen doon to man.
Ten hondred thousand [tales] tellen I kan
Notable of youre untrouthe and brotilnesse (frailty).”

January が May に懐いている疑心に偽りはないが、May の背徳は、好色な老主人の犠牲の結果でもあるのだ。January は May との悦楽の後、至極上機嫌。それに引き換え、May がどう思っているか、Chaucer はこの年若い奥方の気持を、こう推し量っている。

IV (E) 1851

God woot what that May thoughte in hir herte,
Whan she hym saugh up sittynge in his sherte,
In his nyght-cappe, and with his nekke lene;
She preyseth nat his pleyng worth a bene.

Pluto の一方的な女性批評が、同じような境遇の Proserpine の反撥を買う所以でもある。

IV (E) 2272

“Al hadde man seyn a thyng with bothe his yen,
Yit shul we wommen visage it hardily (boldly),
And wepe, and swere, and chyde subtilly,
So that ye men shul been as lewed as gees.”

尤も、Proserpine の後押しが、男からすれば、主人をたばかる May に力を借して、女をどう仕様もない悍婦にしていることに、女の性を思い知らされるのだ。その一方では、女の口さがなさは神のせい、救われていることも見逃せない。話手の商人の言い種はこうである。

IV (E) 1218

I have a wyf, the worste that may be;
 For thogh the feend to hire ycoupled were,
 She wolde hym overmacche, I dar wel swere.
 What sholde I yow (i.e. fellow pilgrims) reherce in special
 Hir hye malice? She is a shrewe at al.

この点、『リディア物語』には神々の助力はない。強いて言えば、奸物の中臈 Lusca の手助けが、謂わば、神の助力に当たると観ることが出来る。この Lusca、Lydia の好き相談相手、Lydia を日の光に準えれば、Lusca は月の存在。Pyrrhus の許へ走使いをして、主人の胸の裡を伝えるかと思えば、主人と同席して、口添えをしたりして尽くすのだ。そうかと思うと、主人の多情と、余りの不貞には、密かに驚愕の念を禁じ得ない一面もある。

Lydia 97

The woman is mad; made strong by love alone
 She dares and ventures, attempts and carries out a crime.
 She raves, she yelps, she is hot on the trail of the hare;
 She pursues the hare while shame itself departs.
 O easy morals! One man is not enough for one woman;
 For this woman, I think, neither Decius nor ten men would
 suffice.

そうかと言って、Lydia に向かい意見はしていない。それどころか、主人の意がある所を、口を極めて訴え、Pyrrhus に迫っている。

Lydia 233

“Lydia sighs and her sighs speak of you,
 Pyrrhus, with clear signs; blind love opens her eyes;
 Love weakens the strength of her body and pains her heart.”

Lydia の企みが巧くいくと、Lusca は笑いを噛み殺しているのだ。無論、主人の企みが巧くいったことをだ。だが、若しかしたら、Lusca の笑いは、作者の立場から、Lydia の愚かしさに対し、殊の外、嘲笑を禁じ得なかったということかも知れない。因に、Lusca の述懐には、自分と同じ女性に対する批評が見られる。

Lydia 111

Each(i.e. woman) knows her own itch and all sweat with desire.
 Shame? Ha! Shame is to test the works of shame.

女の悪巧み

Decius は『商人の話』の老騎士とは違って、年の程も定かでないし、格別、焼餅焼というでもないのに、Lydia にたばかられているから、それだけ『リディア物語』には、女の悪巧みに対する警告が強い。そういう Lydia に背かれる Decius は同情に価するのだ。この点では、『商人の話』の January も、完膚なきまでに May にしてやられるから、悲愴である。Decius の禍は、Pyrrhus に懸想する多情な Lydia の背徳と悪巧みのせいだ。Decius は、年もその考えも、格別、話の進み行きとは係わりを持っていない。否、むしろ Lydia の言葉を借りると、『狩に興じて奥方を顧みることをしていない』のだ。これも、Lydia の背徳に力を借していると考えられる。

Lydia 301

He prefers the forest to my chamber and the fields to my bed.

無論、Lydia のこの言葉を額面通り取る訳にはいかぬ。悪巧みが隠されている

やも知れぬからだ。Lydia の憾み言は、Decius の心を惹く媚態の一つにもなっているのだ。Lydia は、多分いつもの媚態を作って Decius に迫り、Pyrrhus から、恋の証として遣るよう言われた、主人の隼殺しをしているからだ。さらに、次々と主人の鬚抜き、歯抜きも、まんまと遣って退け、Pyrrhus と情事を成就、剩え、示し合わせて主人の愚弄を謀っている。

Lydia 467

I know that the Duke can be deluded more absurdly
 Though he himself sees, he will think what he sees is nothing.
 If he catches me with you (i.e. Pyrrhus) in the act of Venus,
 He will not believe his eyes; thus I wish it and order it to be.

『商人の話』の方は、January が多情で、年若い May を溺愛する処に、禍の因がある。この January、大層お盛んで、May に盲目的な愛をする余り、目が見えなくなって仕舞い、Pyrrhus に絆された May に、まんまとしてやられ、形無しの態。いい年をして、盲目的愛に溺れ、May の外は目が利かなくなったのだ。May の背徳は多分に、こういう January にも責を負わすべきものがある。

註

(1) テキストは、Larry D. Benson and Theodore M. Anderson ed., *The Literary Context of Chaucer's Fabliaux*, Indianapolis, 1971, pp. 206-233 に拠る。

『商人の話』については、F. N. Robinson ed., *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed., Boston, 1957 を使用。

(2) W. F. Bryan and G. Dempster ed., *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, London, 1958, pp. 341-356 参照。

(3) Larry D. Benson and Theodore M. Anderson, *op. cit.*, pp. 203-204 参照。

(4) Thomas D. Cooke, *The Old French and Chaucerian Fabliaux*, Missouri, 1978, pp. 187-188 参照。

(5) Benson と Anderson は、Vitalis of Blois, Matthew of Vendôme, Geoffrey of Vinsauf, John of Garland の名を挙げている。Larry D. Benson and Theodore M. Anderson, *op. cit.*, pp. 206—207 を見よ。

(6) Schlauch は、January の話を持っている、陳腐な *fabliau* の筋立の中に、宮廷愛に対する諷刺があることを指摘している。M. Schlauch, *English Medieval Literature and Its Social Foundations*, Warsaw, 1956, pp. 273—274 参照。

Holman は、Capellanus を引合いに出して、January を初めとし三角関係の当事者の態度が、多分に宮廷風である点、商人の下卑た話が、宮廷愛を諷刺していると述べている。C. Huch Holman, 'Courtly Love in the Merchant's and the Franklin's Tales' in E. Wagenknecht ed., *Chaucer: Modern Essays in Criticism*, New York, 1959, pp. 240f. を参照せよ。

『粉屋の話』のような下卑た話は省略してもいい、と言う Chaucer の提言は別として、若い女房を年が隔たった亭主が持つこととか、女の悪巧みに対する諷刺など、作者は読者のモラルに訴えながら、宮廷や宮廷愛を諷刺している。中産出の Franklin 同様、January が騎士で、宮廷志向があることは、宮廷に対する諷刺を免れるものではない。T. Hira, 'Chaucer's Laughter' in *Bulletin of the Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University*, Vol. 20, No. 1, 1979, pp. 38f. 参照。

豪商騎士に付いては、T. Hira, 'Chaucer's Gentry in the Historical Background' in *Essays in English and American Literature in Commemoration of Professor Takejiro Nakayama's Sixty-First Birthday*, Tokyo, 1961, pp. 31f. 参照。

B. L. Honeycutt, 'The Knight and His World' in Thomas D. Cooke and Benjamin L. Honeycutt ed., *The Humor of the Fabliaux*, Missouri, 1974, pp. 75f. も参照せよ。

(7) F. N. Robinson, *op. cit.*, pp. 712—713 を見よ。

(8) パースのおかみさんが、January の話をする積りも、作者にあったという推測がある。F. N. Robinson, *op. cit.*, p. 713 参照。

Kittredge は *Wife of Bath's Prologue* から始まる一連の話に、夫婦間の 'yok of sovereynetee' という問題が扱われていることを看破。Wife of Bath's Prologue から、Wife of Bath's Tale, Clerk's Tale, Merchant's Tale, Franklin's Tale に 'Marriage Group' の名を冠した。G. L. Kittredge, 'Chaucer's Discussion of Marriage' in E. Wagenknecht ed., *op. cit.*, pp. 188—215 を見よ。

(9) パースのおかみさんは、己れの色好みと向う意気が強いのは、それぞれ Venus と Mars の星のせいと考えている。

III(D) 609

I am al Venerien

In feelynge, and myn herte is Marcien.

Venus me yaf my lust, my likerousnesse,
 And Mars yaf me my sturdy hardynesse;
 Myn ascendent was Taur, and Mars therinne.

⑩ パースのおかみさんは、男の女性諷刺が、女の悪巧みを戒めるものであることを充分承知の上、手練手管は女の性で、どう仕様もない根柢を聖書に求めている。

III(D) 715

that (i.e. Eve) for hir wikkednesse
 Was al mankynde broght to wrecchednesse.

パースのおかみさんは読者の目には、淑やかならざる気性が荒い女と映じたものと考えられる。

⑪ E. Salter, *The Knight's Tale and The Clerk's Tale*, New York, 1962, pp. 33f. 参照。

⑫ 『騎士の話』では、Theseus 同様、経験と知識に富んだ Saturn が、Palamon と Arcite にそれぞれ、騎士の願いを約束した Venus と Mars、及び Emily に祈願された Diana 相互の間を取り仕切っている。Salter は Theseus と Saturn を関係付けていない。E. Salter, *op. cit.*, pp. 30-32 参照。

⑬ Thomas D. Cooke, *op. cit.*, p. 186 参照。

⑭ 例えば、*The Metamorphoses of Ovid*, tr. Mary M. Innes, Penguin Books, 1961, pp. 136-142 を参照せよ。

⑮ 『騎士の話』で、Arcite は、試合に勝つことを願って Mars に祈り、Palamon は、愛の方に強く惹かれて、Venus を頼っている。戦の神 Mars は、Arcite にとって、先ずは試合に勝ち、Emily を手に入れる考えを現わしている。愛の神 Venus は、一途に Emily へ傾く Palamon の心の現われ。

因に、Palamon と Arcite のことを語る騎士 (Knight) は、Theseus がテーベを下した後、狩猟に興じるようになったことを、関係深い神々に置き換えている。

I (A) 1682

after Mars he serveth now Dyane.